

農学系留学生の言語使用

中村 純子

キーワード : 農学部、日本語能力、使用言語、日本語能力不足の問題点、求められる日本語教育

要旨

信州大学農学部大学院レベルの留学生が留学生活を送る上で日本語能力不足が問題として顕在化する4つの事例を取り上げて、その言語使用の問題点と求められる日本語教育について記述した。4つの事例は15名の留学生の日本語能力不足の問題点を使用言語、日本語能力によって分類した4つのケースからひとつずつ取り上げたものである。これらの事例では留学生の現在持っている日本語能力が異なるだけでなく、研究上の使用言語が日本語か英語かで、ゴールとなる日本語能力が異なっており、日本語教育に求められるものにも異同があった。現在の日本語教育の体制では対応が難しく、多様化が求められる。

1. はじめに

留学生の言語使用状況は各大学の留学生センター紀要等で報告されているが、多くが大学院入学前日本語予備教育修了生に焦点が当てられており、従って初級を終えたレベルの日本語学習歴を持つ留学生の言語使用状況の報告に限られている¹⁾。しかしながら、各大学大学院には多様な学習歴を持つ留学生が存在し、その日本語能力は一律ではない。留学生の日本語能力不足からくる問題点も、求められる日本語教育も多様である。

また留学生の使用言語も一律ではない。研究における使用言語の多様性は予備教育修了生にも共通することだが、少なくとも予備教育修了生は研究室での日常のコミュニケーションや日常生活では日本語も使用できる。しかし大学院には日本語が全くできない状態で来日する学生もおり、その多くの留学生の使用言語は研究においても、日常においても英語である。留学生の使用言語が日本語か英語かによって、更にその場面・話題が研究か日常かによって、日本語能力不足からくる問題点も求められる日本語教育も異なってくる。

本稿では異なる使用言語、日本語能力を持つ信州大学農学部大学院レベルの留学生の言語使用の具体的事例を通して、日本語能力不足からくる問題点と求められる日本語教育について記述する。事例の選択は全指導教官を対象にして、2000年7月に実施したアンケートとインタビュー調査の結果に基づいている。これらの調査の結果、留学生の日本語能力不足からくる問題点は使用言語、日本語能力のレベルによって4つのケースに分けられた。

本稿で記述する4つの事例はこの4つのケースからそれぞれひとつずつ取り上げた。

更に信州大学農学部大学院では多様なニーズを持つ日本語学習者の唯一の日本語教育機関として日本語補講が開講されているが、果たして日本語補講が多様な留学生のニーズにどこまで応えられるかを考えてみたい。

2. 日本語能力不足が問題として顕在化する4つのケース

4つの事例を記述する前に、農学部大学院レベルの留学生が留学生活を送る上で日本語能力不足が問題として顕在化する4つのケースについて記述する。4つのケースの分類は2000年7月の調査（以後2000年7月調査と呼ぶ）の結果に基づいている。

2-1. 2000年7月調査

2000年7月調査は2000年7月から10月に2000年5月1日現在、留学生を受け入れている教官を対象に留学生の日本語能力の評価と日本語教育への要望を調べる目的で行った調査である。アンケート調査²⁾とそれを基にしたインタビュー調査からなる。調査項目は、担当留学生の属性、主なコミュニケーション言語（研究・日常の話題を含む）、論文に使用させる言語、担当留学生の英語の能力、担当留学生の日本語の4技能（話す、聞く、読む、書く）の評価と漢字の必要度、日本語教育に期待すること等である。調査の概要は以下の通りである。

2000年7月調査・アンケート調査

調査日時：2000年7月20日配布 7月31日回収（一部、9月22日～9月27日回収）

調査対象者：信州大学農学部教官 21名（回収19名 担当留学生 21名）

調査方法：アンケート調査

調査者：中村純子

2000年7月調査・インタビュー調査

調査日時：2000年9月18日～10月12日 各0.5時間～1時間

調査対象者：信州大学農学部教官 19名（担当留学生 21名）

調査方法：インタビュー調査（アンケート調査を基に詳しく調査する）

調査者：中村純子（一部、青柳にし紀〈農学部日本語補講担当講師〉の協力を得る）

2-2. 日本語能力不足が問題として顕在化する4つのケース

2000年7月調査の結果、指導教官から日本語能力に問題ないと評価されたのは留学生21名中6名だった。残りの15名の留学生は日本語能力に何らかの問題があると評価された。その15名の問題点は研究の使用言語（日本語か英語か）、日本語能力（日本語による研究活動処理能力・日本語による日常生活処理能力³⁾）のレベルによってC1、C2、C3、C4の4つに分れた（表1参照）。以下にケースごとの教官の判断の概略を記す。

【表1】日本語能力不足が問題として顕在化する4つのケース

	研究の使用言語(人数)	日本語による研究活動処理能力	日本語による日常生活処理能力
C1	日本語(4)	不 充 分	充 分
C2	日本語(2)	不 充 分	不 充 分
C3	英 語(2)	不 充 分	不 充 分
C4	英 語(7)	不 充 分	充 分

C1に属する留学生は4名いた。英語能力に関しては、文献の読解はある程度できるが、研究上のことをすべて処理できる能力はないとしており、研究の使用言語は日本語である。日本語能力については日常生活処理能力は充分だと評価している。しかし研究の使用言語が日本語であるため、研究上のことを処理するのに4技能にわたって高い日本語能力が必要だが、その能力が不足していると判断している。

C2は2名いた。英語能力に関しては、文献の読解力はある程度あるが、口頭のコミュニケーション、論文を書くことは難しいレベルであると判断しており、研究の主な使用言語は日本語である。その日本語能力は研究活動を処理する能力の不足に加えて、日常生活を処理する能力も不足しており、特に口頭コミュニケーション能力に問題があると評価している。ただ、2名とも漢字圏出身なので、漢字能力を活かして筆談が可能であるし、日本語文献の読解力もあると判断している。

C3に属する留学生は2名いた。このケースの留学生の英語能力は高く、研究における使用言語は英語である。指導教官は研究活動を処理する日本語能力は充分ではないとしながらも、日本語の勉強に来ているわけではないので仕方がないとしている。問題は日本語能力不足による日本人学生との口頭コミュニケーション（研究及び日常の話題を含む）や事務手続きをはじめとする日常生活の困難にあると判断している。日本語の読み、書きはほとんどできないが、教官は留学生に読み、書きを期待していない。

C4に属する留学生は7名いた。7名とも英語能力は高く、研究上の主な使用言語は英語である。日本語能力については日常のことに関する口頭コミュニケーションは可能なレベルであるが、研究上の口頭コミュニケーション能力が不十分であり、日本語学習が必要だとしている。C3の教官が留学生に研究における日本語での口頭コミュニケーション能力を期待していないのと対照的である。留学生にある程度日本語能力があると、教官の留学生に対する日本語能力への期待度も高まるのが一因かと思われる。読み、書きに関しては、英語が使えるので、不十分だが日本語の勉強に来ているわけではないので仕方がないという評価である。ただし、研究のフィールドが日本である留学生が2名おり、指導教官はこの2名には日本語で書かれた文献の読解力も要求している。しかしながら漢字能力の問題もあり、文献の読解には困難があると判断している。本稿ではこの読解力不足が研究活動に及ぼす影響の深刻さを考慮に入れて、次節の具体的事例として、この2名のうちの1名の事例を取り上げる。

3. 農学部留学生の言語使用—4つの事例

本節は既述の4つのケースから具体的な事例をひとつずつ取り上げて、日本語能力不足による問題点、求められる日本語教育について指導教官および担当留学生の双方の視点から具体的に記述する。指導教官4名の記述は既述の2000年7月調査の結果を基にしている。担当留学生4名の記述は2000年11月に行ったインタビュー調査（以後2000年11月調査と呼ぶ）を基にしている。

3-1. 2000年11月調査

2000年11月調査は4つのケースに属する留学生の中からそれぞれ1名を選んで、言語能力の自己評価、言語能力不足による困難な点、困った時の対応、日本語教育に対する要望等を調べた調査である。調査方法は半構造化インタビューの形を採った。調査項目をある程度統一したかったこと、留学生の自由な発言も重んじたかったからである。調査の概要は以下の通りである。

2000年11月調査

調査日時：2000年11月27日～11月29日 各1時間～2時間

調査対象者：信州大学農学部大学院レベル留学生4名

調査方法：インタビュー調査

調査者：中村純子

3-2. 4つの事例の留学生の背景

具体的事例として取上げる留学生の背景を2000年11月調査からまとめた（表2参照）。

【表2】調査対象となった留学生の背景

	C1 (*F1)	C2 (*F2)	C3 (*F3)	C4 (*F4)
年齢	20代後半	20代後半	30代半ば	20代後半
出身国 (漢字圏・非漢字圏)	漢字圏	漢字圏	非漢字圏	非漢字圏
調査時の身分	M1	M1	D2	M1
滞日年数	7年	1年	4年	1.5年
日本語学習歴 (年数)	日本語学校 (2年) 日本の大学学部 卒業	自国の大学での 日本語教育 (1年) 日本補講受講 (1年)	日本語補講受講 (3年)	大学院入学前日本 語予備教育修了 (6ヶ月) 日本補講受講 (1年)

*F1、F2、F3、F4はそれぞれC1、C2、C3、C4に属する留学生という意味である。以下同じ。

4名の留学生は20代後半が1名、30代半ばの留学生が1名である。2名は漢字圏、2名は非漢字圏の出身である。滞日年数は長短の差がかなりあり、日本語学習歴も様々である。調査者は3名の留学生の日本語補講（詳細後述）を担当した経験を持ち、残りの1名とも面識がある。留学生の日本能力については把握している。調査者の判断では日本語能力に

については、F1が一番高く、F4と続き、F2とF3がくる。F2、F3は技能によってレベルの高低に相違がある。話す、聞くについてはF3が高く、読む、書くについてはF2の方が高い。

3-3. 指導教官による留学生の日本語能力の評価と求める日本語教育

4つの事例の留学生の日本語能力の評価と求める日本語教育を中心に指導教官の視点から記述する（表3参照）。

【表3】指導教官の留学生の日本語能力評価

		①	②	③	④
C1	*T1	**日・日	日	話す、聞く、書くについては日常は充分だが、研究上不充分。読みは充分。	論文が書けて、研究上の議論ができる能力の養成。
C2	*T2	日・日	日	4技能とも、日常・研究のことを処理するのに不十分。	日常の会話ができ、更に研究上のことが処理できる能力の養成。
C3	*T3	***英・英	英	話す、聞くについては****不十分だが仕方がない。読み、書きについては必要ない。	サバイバル的日本語を最初にやってほしい。日常の会話能力の養成。
C4	*T4	日・日	英	話す、聞く、読むについては日常は充分だが、研究上不充分。書くについては不十分だが仕方がない。	学生とのコミュニケーションができる会話能力の養成。

①留学生と指導教官のコミュニケーション言語（日常・研究）は何か。

②論文に使用させる言語は何か。 ③日本語能力に対する評価はどうか。

④求める日本語能力と日本語教育への要望。

*T1、T2、T3、T4はそれぞれC1、C2、C3、C4に属する留学生の指導教官という意味である。以下同じ。

日は日本語、*英は英語、****「不十分だが仕方がない」というのは、「不十分だが、日本語の勉強に来ているわけではないので仕方がない」という姿勢を示す。

3-3-1. C1 T1からF1の日本語能力評価と求める日本語教育

T1はF1は英語ができないと判断しており、コミュニケーション言語は日常のことも、研究のことも日本語である。論文も日本語で書かせるつもりである。日本語の話す、聞く、書くの3技能に関しては、日常のことを処理するのに十分な能力があると判断しているが、研究の上のことを処理するには不十分だと感じている。読みについては研究においても充分という評価をしている。

留学生の日本語能力については「日常のことはもちろん、最終的には日本語で論文が書けて、研究に関する議論ができて一人前」と考えている。これは留学生を含めた学生一般にも望むことで、F1が英語ができないからというわけではないようだ。そのため日本語教育にもこの最終目標をしっかりと見据えた教育を望んでいる。

3-3-2. C2 T2からF2の日本語能力評価と求める日本語教育

T2はF2とは、日常のことは日本語、研究の話になると英語と日本語、それから同研究室の同国人の通訳（F2の配偶者）を立てて行っている。T2はF2の日本語能力については研究室で研究についての話をするのに不十分であるばかりでなく、日常の話をする

のにも不十分だと感じている。読み、書きについても不十分であると感じているが、中では読む力が一番あると判断している。英語はあまりできないという評価をしており、ゼミ発表、論文は日本語で行う予定である。そのため4技能にわたって高い日本語能力を求めている、現実の留学生の日本語能力とのギャップがかなりあると思われる。

日本語教育に望むことは日常会話力の養成と更に専門の研究が処理できるような教育である。ただし、T2は研究をやりながらできる範囲ということを条件に考えている。そのためチューターの制度等も充実させたいとしている。

3-3-3. C3 T3からF3の日本語能力評価と求める日本語教育

T3はF3とのコミュニケーションは日常のことも、研究の話も主として英語で行っている。論文も英語で書かせるつもりである。T3はF3の日本語の能力については、話す、聞くについては「不十分だが、日本語の勉強に来ているわけではないので仕方がない」としている。また、読み、書きについては英語で行うため「必要ない」と判断している。研究の基本は英語であり、「日本語の文献を読むよりは英語の文献を読んだほうがいい」という考え方である。しかし、「どんな場合に日本語能力が不十分だと感じるか」という問いには、研究の話をする時、事務関係の処理、雑談をする時等があがっており、留学生に対してかなり助力が必要な現実が浮き彫りになっている。急ぎの手紙を英語のフォームで書いて、郵便局が理解できずに戻った来てしまった等の例をあげて、外国人に対する地域の体制の不備等も指摘していた。

T3は日本語教育は日常生活のためには絶対必要だと考えている。「F3は大学推薦で日本に来たため、日本語は全くの未習の状況であったが、現場で覚えていけばいいと思い、日本語の予備教育は免除した。しかしそのことは後悔しており、今では日本語の予備教育は絶対必要だと考えている」と語っていた。更に「日本語補講には最初にサバイバル的日本語を教えてほしい。来日直後に一番助けが必要だが、日本語補講は積み上げ式なので役に立たない」という問題を提起している。

3-3-4. C4 T4からF4の日本語能力評価と求める日本語教育

T4はF4と日常および研究のことを話す時の使用言語は日本語であるが、研究の話になると時々英語が混じるようだ。日本語を主な使用言語とするのは留学生自身の希望にもよる。T4はF4の日本語能力については日常のことに関するコミュニケーションではあまり不自由はないが、研究上の複雑な話になると不十分だと評価している。

一番の問題は日本のことを研究のフィールドに選んでいるため、日本語の文献を読まなければならないが、その力が不足していることだと理解している。書く力に関しては、F4が論文を英語で書くことになっているので、「不十分だが日本語の勉強に来ているわけではないので仕方がない」としている。しかし「できれば日本語で論文を作成してほしい。その方が多くの日本人の学者に読んでもらえる」と思っている。

T4が日本語教育に望むことは日常の会話能力の養成で、特に学生との話のできるようなある程度くだけた日本語の教育を望んでいる。専門に関する日本語（論文に関すること

や専門用語)は研究室の責任であると考えている。

3-4. 留学生の言語使用状況と日本語教育への要望

留学生自身がどんなことに言語能力不足からくる問題を感じ、どのようにそれに対応しているかを記述する。更に留学生が日本語教育に望むことは何かも記す。調査項目はおおよそ下記のようなものであるが、留学生によっては当てはまらない項目もあり、その際、その項目については記していない。

- ① 教官、他の学生とのコミュニケーション
- ② ゼミでの自分の発表、他の学生の発表
- ③ 講義を受ける
- ④ 文献を読む
- ⑤ レポート・論文を書く
- ⑥ 調査・実験をする
- ⑦ 事務手続き(校内・校外)
- ⑧ 日本語教育への要望

3-4-1. C1 F1の言語使用状況と日本語教育への要望

指導教官、他の学生とのコミュニケーションは日本語で不自由はない。ゼミでも自分の発表は日本語で行っているし、質問にも答えられる。他の学生の発表では分からないこともあるが、そういう時は質問をする。前は分かったふりをして誤魔化すことがあったが、今はそういうことはしない。講義、文献の読解では時々内容が分からないことがあるが、それは日本語能力の問題ではなく、むしろ内容的な問題である。レポート、論文等は日本語で書くことに不自由はないが、言いまわし等は指導教官等に見てもらおう。

事務関係の処理に関しても不自由はないが、入学願書とか奨学金の申請とか大事なものは知り合いの日本語教師に文章を見てもらったりしている。

日本語教育に望むことは、個別に留学生の質問に答えるようなコンサルティングの時間を設けてほしいということである。

3-4-2. C2 F2の言語使用状況と日本語教育への要望

教官、他の学生とのコミュニケーションは研究上のことも、日常のことも日本語で行うが、分からない時は配偶者である同研究室の学生に通訳をしてもらったり、漢字を書いて筆談を行ったりしている。ゼミでは発表は日本語で行う。他の学生のゼミ発表は研究内容が分かれば分かる。質疑応答は自分の発表では分かるが、他の学生の時は分からないこともある。その時は他の学生に聞いたりすることもあるが、分からないままの時もある。講義もすべて日本語だが、分からないことがあれば辞書を引いたり、他の学生に聞いたりしている。文献の読解に関しては、日本語と英語の文献が半分くらいずつあり、辞書を引きながらであるが、自分でやれる。レポート、論文の執筆に関しては、辞書を引いて自分で作成し、それを配偶者に見てもらおう。実験のやり方などは研究室の学生が絵を描いたりして説明してくれた。

学校内の事務手続きでは、できないことは事務官がやってくれたりしている。学校外の事務手続きは配偶者と一緒に行く。

日本語補講に希望することは、会話であるが、論文、レポート、研究計画の書き方も習いたい。日本語だけでなく、英語の必要性も感じているので、英語も習いたい。

3-4-3. C3 F3の言語使用状況と日本語教育への要望

指導教官とのコミュニケーションは日常、研究の話とも英語が多いので、問題がなかったが、他の学生とのコミュニケーションが最初はできなくて問題だった。特に雑談は難しかった。最近は何とか日本語で行っている。専門の話は学問の背景の共通知識があるので、言語能力不足はコミュニケーションにあまり障害にならない。ゼミでの発表は英語で行っている。他の学生の発表は日本語だが、英語の文献に関してのゼミで、内容が分かっているので、だいたい理解できる。質疑応答などは、最初は日本人学生が日本語で行って、教官がそれを英語に訳してくれたりしたが、いまではだいたい分かるようになった。日本人学生に日本語での発表を頼まれたこともあるが、発表は日本語でできたとしても、その後のディスカッションは日本語では難しい。講義は2年前に聞いたが、背景が分かっているのと、英語が含まれているハンドアウト、英語入りの図が多いOHP等があったので、だいたい理解できた。レポート、文献の読解、論文の執筆は英語で行うので困ることはない。

最初は大学関係の事務手続きは全くできず、同国の留学生が通訳をしてくれたりして手伝ってくれた。漢字を書かなければならないところは、今でも日本人学生にやってもらう。学校外の生活に関しても銀行等は最初同国の友人と一緒に来てくれた。困っているのは英語のフォームがない書類があることで、それらの書類は正式書類であっても、そのままでは自分の国に提出できない。

日本語教育に望むのは場面別、トピック別の日本語で、漢字も生活漢字等を教えてもらえればよいと考える。

3-4-4. C4 F4の言語使用状況と日本語教育への要望

教官、学生とのコミュニケーションは日常、研究の話とも日本語で行っているが、研究の話で日本語が分からなくて困った時は、指導教官も、他の学生も簡単な日本語を使用し、説明してくれる。ゼミで発表する時は今のところは日本語で行っている。2年になって忙しくなったら英語で行うと思う。質疑応答も日本語で行われるが、自分の発表については問題はない。他の学生の発表は事前に書かれたレジメ（日本語）を読んでおけば分かるが、人によって聞き取りが難しいこともある。分からない時は他の学生に聞く。講義は70パーセントくらい聞き取れる。授業で配布されるレジメ等は写真があるので分かりやすい。レポートは日本語で作成することもあり、他の学生に日本語を直してもらった。論文は英語で執筆するので、言葉の問題はないが、論文の要旨は日本語で作成するつもりであるので、その際は指導教官、学生等に日本語を直してもらう。

問題は研究のフィールドが日本のため、日本語の文献を読むことが必要なことだ。何とか自力でできるが、時間がかかる。いままでひとつの文献しか読めていない。フィールド調査に際しては、土地の人の日本語がなかなか分からないことが多い。日本人学生と一緒に連れてもらって助けてもらった。調査票や依頼の手紙等はこれから作成しなければなら

ないが、日本人学生、日本語の先生等にチェックしてもらおうつもりだ。

学校内、学校外の事務手続きに関しては、なかなか聞き取りができなかった。最初は日本人学生と一緒にしてもらったが、今は大丈夫である。しかし今でも研究室の日本人同士の雑談等に入ることは難しい。それは日本語の問題もあるけれど、話されている内容の背景が分からないことが多いからだ。

日本語教育に望むことはコンサルティングの時間がほしいということである。現在、日本語補講中級の時間をそのように利用している。来年は日本語補講には出席しないが、時々質問に行ければいいと思っている。

3-5. 日本語能力不足からくる問題点のまとめ

指導教官、留学生の双方の視点から事例ごとの日本語能力不足の問題点をまとめてみる。

T1によるとF1の問題点は研究で使用する言語が日本語であり、研究のことをすべて処理する日本語能力が要求されているのに、そのレベルに達していないことである。F1はC1にあてはまる留学生の中で最も日本語能力のある留学生であり、F1自身の評価から判断すると、比較的日本語能力の不足から生じる困難は少ないと思われる。F1があげた問題点は日本語能力不足の問題より、むしろ研究内容の理解不足による問題の方が大きいように思われた。それでも教官側から見れば、大学院レベルの学問をこなすに十分な日本語能力ではないという評価もありうるわけである。使用言語が日本語の場合、大学院レベルの留学生に要求される日本語能力がいかに高いものかが分る。

T2によるとF2の問題点は研究で使用する主な言語は日本語であるにも関わらず、現在の留学生の持っている日本語能力は研究上のことを処理するには著しく不足していることである。加えて日常のコミュニケーション能力も不十分なことであった。F2は専門の知識、漢字の能力、英語文献の読解力等を活かして何とか日本語能力不足を補っていたが、それでも研究活動および日常生活に周りの助力がかなり必要なことが窺われた。F2は研究をやりながら日本語を学んでおり、T2もそれを希望しているが、日本語学習に費やせる時間の問題もあり、研究活動を日本語で充分行えるようになるまでには、かなり時間がかかると思われる。

T3は研究活動では英語優先の考え方から、F3の日本語能力の不足については、仕方がないという姿勢である。研究上の主な使用言語は英語で、論文も英語で読み、書きできるし、指導教官とのコミュニケーションは英語で行われるので、これらの点では問題がない。しかし、日本人学生との研究上のコミュニケーションや日本人学生のゼミ発表等は日本語で行われていた。F3の場合は背景の専門的知識、英語文献、教官の助力等があり、日本語能力不足を何とか補っていたが、研究の使用言語が英語といっても、環境的に英語だけで済まされないのが現実である。実際C3、C4の他の研究室でも2000年7月調査の限りでは、日本人学生のゼミ発表が英語で行われているところはなかった。

また、T3、F3が述べているように、F3の最も深刻な問題として日本語能力不足に

よる日本人学生との研究室での日常のコミュニケーション、学校内外での事務手続きをはじめとした日常生活の困難がある。特に来日直後のような日本語が全くできない時の困難は大変なものがあった。また、日本語の読み、書きがほとんどできないので、事務手続き等に関して常により周りの助力が必要となる。

T4によるとF4の問題点は研究上での日本語の口頭コミュニケーション能力不足であった。F4からもゼミの日本人学生の発表、フィールド調査における地域の人の日本語の聞き取り等に助力が必要ながことが窺われた。F4の日本語能力は中上級に達しており、日本語習得に対して熱心で、英語が許される環境でも自ら日本語を積極的に使用している（実際C4の留学生の中で日本語でゼミ発表を行っているのはF4のみである）。F2、F3ほどではないにしろ、F4の日本語能力をもってしても、研究上のコミュニケーションについては困難な点が種々ある。

また、T4、F4が述べているように、F4の場合は、研究のフィールドが日本であるため、日本語文献の読解力の不足が最も問題である。F4によると読解は何とか自力でできるようだが、時間がかかるようだ。F4は非漢字圏の出身であるが、大学院入学前日本語予備教育を修了しており、辞書が引けて、ある程度自律的学習ができる基礎があったことが何とか日本語の文献の読解ができることに繋がったと思われる。研究のフィールドが日本の場合、使用言語が英語であっても、少なくとも文献の読解が自律的にできる能力が必要になる。

以上のように、事例によって日本語能力不足からくる問題点は多様であったが、留学生はそれぞれ背景の知識、漢字の能力、英語の知識等を活用し、日本語能力不足の問題をある程度補っていた。また、教官、研究室の学生、同国人の学生、事務官等、回りからの多大な助力も受けていた。留学生が指導教官をはじめ、周りに感謝している様子がインタビューの間随所に感じられた。今回インタビュー調査に協力してくれた留学生は、性格的にオープンで、比較的他人と良い人間関係を作れるタイプの学生であったので、援助が得やすかったこともあるだろう。すべての留学生がこのようにいくとは限らない。

3-6. 農学部の日本語教育の現状と求められる日本語教育

現在の農学部の日本語教育が留学生、教官の要望にどこまで対応できるか考えてみたい。

信州大学農学部では1994年度以降、留学生のために日本語補講が開講されている。日本語補講は、初級クラス、中級クラスがあり、週2回、2時間ずつ行われる。昨年度の授業時間は各レベル年間約120時間に及んだ。

しかし、120時間という時間数は初級の日本語を習得するには充分とは言えない。更に中級クラスになると初級クラスで1年間しか日本語をやっていない留学生（実際は初級の後半くらいの実力の留学生、例えばF2）と大学院入学前日本語予備教育で集中的に日本語を学習してきた留学生（例えばF4）が一緒のクラスになることがありうる。中級クラスのレベルの多様化には対応が難しい状況がある。

日本語能力が中級から上級の留学生のニーズに対応する方法として、「コンサルティングが受けられるようにしてほしい」という希望がF1とF4から出ていた。これは上級になるほどニーズが個別化してくる現実を考えると有効な方法であろう。現在、F4は中級の日本語補講でこのような指導も受けているようだが、これも年度によっては人数、レベル等によって難しい場合もある。

また、T3の指摘するように、F2、F3のような日常生活に困難なレベルの日本語能力の留学生には集中的な日本語学習の時間が必要だと考える。しかしながら、留学生によっては留学に時間的制約等があり、研究をやりながら日本語を学ばなければならないこともあるかと思われる。チューター制度等の活用、来日直後の短期間の集中的日本語クラスの開講等、今後検討していかなければならないことだと思われる。

日本語能力の多様化だけでなく、事例によりゴールとなる日本語能力が異なることも留学生のニーズに応えることを難しくしている。F3、F4のように研究の使用言語は基本的には英語である留学生と、F1、F2のように日本語である学生ではゴールとなる日本語能力が異なる。前者は主として話す、聞くを中心とした日常の会話能力の養成を日本語教育に希望し、後者は日本語で研究活動を行うために十分な日本語の4技能の養成を希望している。特にF2とF3のような留学生は来日直後、日本語初級クラスを一緒に受講することが多いため、ゴールとなる日本語能力の相違はコースデザインの上で難しい問題を生む。

また、F4のように研究のフィールドが日本であれば、研究上の使用言語が英語であっても、日本語で書かれた文献等が読めるような漢字能力、読解力が求められる場合もある。専門に関わることは日本語教育では難しいにしても、少なくとも辞書を引けるような自律的学習能力を養成することは日本語教育の範囲であると思われる⁴⁾。しかしながら、漢字の体系的指導および読解指導は日本語補講の時間数が短く、読むこと、書くことに費やせる時間が少ないことから対応が難しいのが現実である。

以上、同じ学部の留学生の中でも求める日本語教育に差があるが、体制的に充分それに対応できるようなシステムがないのが現状である。また、F3、F4のように研究の使用言語が英語と言っても、現実には日本人学生が英語で対応できない場合も多い。留学生の日本語教育だけでなく、日本人学生、英語能力の低い留学生の英語教育の充実ということも、研究の使用言語の主流が英語になりつつあるという農学部の現実を考えた場合、必要となる⁵⁾。今後は日本人学生、留学生を含めた語学教育の体制の多様化が望まれる。

また、日本人学生と単に意志の疎通を行うだけの日本語能力ではなく、円滑なコミュニケーションをとれる日本語能力の養成を希望するということがT4からあげられていた。留学生が日本人学生をはじめとする周りの助力で日本語能力不足を補っている現実を考えると、全留学生にとって周りの人と円滑なコミュニケーションをとれる日本語能力の養成は非常に重要なことだと思われ、日本語補講のひとつの目標にしていかなければならないことだと思われる。

4. おわりに

本稿では農学部大学院レベルの留学生の言語能力不足からくる問題点、求められる日本語教育を具体的事例を通して明らかにした。またそれに対応できない農学部の日本語教育の問題点も明らかになった。

ここにあげた4つ事例は留学生の言語能力不足が問題として顕在化する事例のすべてではもちろんない。しかし4つの事例は15名の留学生の日本語能力不足の問題点を使用言語、日本語能力によって分類した4つのケースからひとつずつ取り上げたものである。留学生全体の問題もある程度反映できたと考える。

しかしながら、ケースの分類はあくまで指導教官の視点のみに基づいており、一面的である面は否めない。今後は他の留学生、研究室の日本人学生、事務官等にインタビューを行って、更に多角的に留学生の言語使用の状況を把握していきたい。

謝 辞

調査の際して、農学部の教官、事務官、留学生の皆様には大変お世話になりました。貴重なお時間をさいて調査にご協力くださり、誠にありがとうございました。ここに心から感謝申し上げます。

注

- 1) 例えば広島大学留学生センター（1993）、守山他（2000）等。
- 2) アンケートの作成にあたっては日本語教育学会編（1991）のアンケートを参考にした。
- 3) 本稿では研究に直接関わることを研究活動と考える。従って研究活動処理能力とは文献が読め、論文が書け、研究についてディスカッションできる能力をさす。研究室の研究以外に関するコミュニケーション、校内の事務手続き等は研究活動に直接関係ないので日常生活の一部として考える。従って日常生活処理能力とは研究室での日常のコミュニケーション、学校内外の事務手続きをはじめとして日常生活をしていく上で必要なことを処理する能力をさす。
- 4) 日本語教育で専門の領域を扱うためには専門教官と日本語教官の連携が必要となる。連携についての報告は五味（1996）、仁科（1997）等を参照。
- 5) 2000年7月調査の結果によると、日本語能力より英語能力を重んじる教官が多かった。特に論文に関しては英語で書くことを希望する教官が多かった。担当留学生の英語能力を考慮に入れて、仕方なく日本語で論文を書かせるという指導教官もいた。

参考文献

- 五味 政信 1996 「専門日本語教育によるチームティーチングー科学技術日本語教育での日本語教員と専門科目教員による協同の試み」『日本語教育』89号
- 仁科喜久子 1997 「日本語教員と専門教員の連携」『日本語学』第16巻第6号5月臨時増刊号
- 日本語教育学会編 1991 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
- 広島大学留学生センター 1993 「日本語研修コース修了生実態調査報告書」広島大学留学生センター
- 守山恵子・永井智香子・松本久美子 2000
「留学生の求めていること - 研修コース修了生インタビュー調査報告 -」
『長崎大学留学生センター紀要』第8号